

● 教員生活15年を振り返って ●

西村 智先生（関西学院大学経済学部教授）

仏リール第1大学Ph.D.（経済学）。

専門分野は労働経済学。少子化問題（男女交際・結婚・出産行動）や労働問題（女性労働、ワーク・ライフ・バランス）について研究している。

最近の業績に「若者の恋愛離れに関する一考察：恋人探しにみる先送り行動」『人口学研究』No.52がある。



米谷 淳（以下、米谷）：西村先生は関西学院大学の御出身ですね。

西村 智（以下、西村）：学部、大学院とも関学出身です。博士課程3年のときに、現在、本学と学部間ダブルディグリーの提携を結んでいるフランス、リール第一大学に2年半留学しました。

米谷：そこで学位をとられたのですか。

西村：そうです。少子化問題をテーマにして経済学の学位を取得しました。

米谷：それは、世界的な少子化の流れがあったからですね。

西村：日本では、1989年に出生率が過去最低の数値を記録し（1.57ショック）、90年代から少子化が社会問題として認識されるようになりました。その当時日本では女性の就業率が上がると出生率が低下するという見方があったのですが、フランスを見ると、女性の就業率が高く出生率も比較的高い。そこで、日仏比較研究をしようと思いました。

米谷：フランスは少子化ではないですね。

西村：フランスでも90年代前半に出生率が1.66まで下がりましたが、その後、出生率を2.0まで回復させています。その背景に、お金がなくても子供が育てられるよう手厚い現金・現物給付が行われていること、子育てにより男女のキャリアの差が開かないよう政策が行われていることがあげられます。

米谷：先生は、フランスで研究され、関学に戻ってこられて学位をとり、ここで教育職に就かれたのですか。

西村：1年間のブランクはありましたけれども、運よく母校に採用していただきました。

米谷：女性の社会進出を支援するような活動はされていますか。

西村：はい。自治体の男女共同参画審議会の委員を務めたり、民間企業に勤める女性の方々と調査やシンポジウム等で女性のキャリアについて議論したりしています。

米谷：例えばどんな提言をされていますか。差し支えなければ、お話しください。

西村：2年前にスウェーデン、フィンランドとフランスの企業と公的機関を調査して、女性活躍に関する提言を行いました。具体的には「性別にかかわらず優秀な人材を活用すること」、「タレントを資本化すること（上司による部下のキャリアデザイン）」、「女性へのエンパワーメント（女性の背中を押す）」です。

北欧やフランスでは女性が活躍しているイメージがありますが、意外なことに、いずれの訪問先でも女性が男性に比べて遠慮しがちだと伺いました。例えば、新しいポストの公募に男性は躊躇なく手を挙げるけれども、女性は躊躇してしまう人が多い。だから、女性には背中を押してあげることが大事なのだそうです。



夏合宿の白浜にて

また、誰が背中を押すのかについては上司の役割が大きいということもわかりました。

米谷：教育や家庭の中でも、そういう価値観とか、そういう態度を上手に醸成してあげるのが、親や教師の役割ですね。

西村：私のゼミでも女子学生は能力が高いにもかかわらず遠慮をする傾向にありますので、時にはさりげなく背中を押すようにしています。

米谷：でも、関学の女子学生は前向きな人が多いイメージですが。

西村：前向きだとは思いますが遠慮している部分も多いと思います。経済学部は女子が3割弱しかいないという数の問題もあるのか、何か後ろに一歩か二歩下がっている感じがしています。おもしろいことに、非常勤で某女子大に行ったのですが、積極的に意見をいう女性が少なからずいました。女性しかいない環境では女性は自信を持てるのかもしれませんが。

実は、私が女性労働に興味を抱いたきっかけの1つに、私自身が女子高出身だということがあります。女子高では、当然ながら生徒会長も応援団長も女性です。彼女達にはリーダーシップ力があります。学校と交渉して校則まで変えた学年もあったようです。高校時代にそういうしっかりとした女性達を見てきたわけですが、その後、大学に入ると男性の後ろで遠慮している女性達がありました。このギャップにすごく違和感を覚えました。この経験が男女の違いや女性のキャリアへの関心につながったと思います。

米谷：そうですね。先生のゼミの男女比はどのぐらいですか。

西村：学年によってばらばらなのです。男女比が7対3だったり、5対5だったり。時には9対1のときもあります。

米谷：学生の研究テーマは、どのようなものですか。

西村：貧困、教育、少子化をテーマに選ぶ学生が多いです。

米谷：女子学生の割合が低いのはどうしてでしょうか。

西村：母数が少ないことが大きいと思います。それから、ゼミの面接をする際に男女比を一切気にしません。単に意欲ある人を選んだ結果、いろいろな比率になったとい

うことです。

米谷：西村先生のゼミ生はどのような雰囲気ですか。印象的なことはありますか。

西村：ゼミ生は、比較的穏やかで協調性に富んでいる学生が多いです。真面目で意欲もありますが、少々押しが弱いところがあります。それでは、就活で不利になるので、ゼミ生には上品に人を押しのけるよう教えています（笑）。

米谷：具体的にはどんな指導をしますか。

西村：できるだけ小さなグループをたくさんつくり、まずそこでのリーダーになるように仕向けます。

米谷：役割を与えるわけですね。個別指導はどのようにされていますか。

西村：ゼミは、週1回しかないので、もちろん個別指導も必要です。現在、ゼミを担当して8年目になりますが、最初の頃はゼミ運営に苦労しました。今もお修行中ですが、少しは慣れてきたように思います。ひとつ先輩先生に教えて頂いたよい方法があります。それは、学生が発表する前日に、15分でもいいので打ち合わせをすることです。良い発表は、準備や段取りが命です。場合によっては1時間になることもあります。プレゼン内容の確認から時間配分等の段取りまで一対一で相談にのります。そうすると、飛躍的にプレゼンテーションの質が上がります。また、一対一で指導すると、学生の名前を覚えるだけでなく、お互いを知り距離が縮まります。時間はかかりますが、効果的な方法だと思っています。

米谷：手間暇惜しまずですね。

西村：でも、余り手間暇をかけ過ぎると自分の研究に支障が出るので、バランスが大切だと思います。若いときは、そのバランスが滅茶苦茶だったと思います。失敗を繰り返し、改良を重ねて、やっと今、ちょっとだけ落ちついてできるようになったという感じです。

米谷：講義は、どうですか。

西村：家計経済学という講義を担当しています。学生数は多い時で大体300名くらいです。

米谷：それでは、頑張っている若手教員に、西村先生から何かメッセージをいただけますか。

西村：想像力が大事だと思います。最初は、学生と年が近かったにも関わらず想像力が欠けていたように思います。1年目に失敗したのは、自主性を養わなければと考えて、あまりあれこれと口出しをしなかったことです。その結果、学生達のゼミ活動は不活発なものに終わりました。今は、自分が二十歳の時どうだったかを常に考えるようにしています。二十歳で丸投げにされても何もできない、じゃあどうしたら学生達は動けるのか、と考えます。その結果、常に私から三つほどの選択肢を提示します。すべて与えるのではなく、限られた中から選ばせる。そのやり方ですと学生も達成感を感じられるようです。難しいですが、どこまで手を出し、どこから見守るかという見極めが大切です。もちろん今だに失敗することもあります。うまくいったときは学生達のモチベーションが上がり、挑戦してよかったと言ってくれます。その時は、本当に嬉しく思います。

米谷：成功体験みたいなのを残してあげるわけですね。

西村：そうです。私自身もそれほど優秀な学生ではなかったのですが、自分が二十歳のときにどうだったかを常に思い出して、指導するように心がけています。

米谷：ゼミ生は何人くらいですか。

西村：1学年20人です。経済学部は2回生からゼミが始まりますので、三学年で60人です。

米谷：最近の研究はありますか。

西村：直近では、女性の昇進意欲について研究を行いました。分析の結果、女性の意欲にリーダーの経験の有無が関係していることがわかりました。リーダーの経験をすることで、入社時に昇進に関心がなかった人が関心を持つ一方で、リーダーの経験をしないことで昇進意欲がなくなってしまう。

米谷：若い人にもどんどんリーダーの経験をさせる、それが将来につながるわけですね。先生の原動力は何ですか。

西村：クリエイティブなことが好きなことでしょうか。教員の仕事は、研究はもとより授業もクリエイティブな要素が多いと思います。

米谷：誰かにサポートしてもらいましたか。

西村：わからないことは先輩に教えを乞うてきました。

米谷：女性教員も含めて。

西村：経済学部には先輩の女性教員がいませんので、話しやすい男性教員に相談してきました。

米谷：先生の後輩で、西村先生のように教員になられた方はいらっしゃいますか。

西村：同級生は他大学で教員になっています。

米谷：これからも西村先生のような教員が育つと良いですね。



普段の授業にて

(インタビュー日：平成29年1月24日)